講話

幼児の心理

—4—

お茶の水女子大学教授
波多野完治

第四講 自己中心性の諸特徴

フランスの心理学者、教育学者のブールジャード（BOURJADE）はピアジェその他の研究を参照しながら、幼児の「自己中心性」の特性を次のように要約した。

(1) 「自分」と「オレ」（わたし）の未分化

ブールジャードは「自分」（MOI）と「オレ」（JE）とを区別している。自分というのは、心理的個体の内容をなすものでこれは個々ばらばらな事件がこれを形成している。これに反して「オレ」はそれらの自分が体験する事件の背後にあつてこれをまとめるはたらきをするものでいわば主体的統一的自我といつたらよかろうか。又前者をノエマ的自我、後者をノエシマ的自我と呼んだら現象学や実存哲学をやつている人にはかえつてわかりやすいかもしれぬ。

要するに幼児には「自分」は出来てきているが、その自分をまとめてこれにしつかりした形をあたえる作用的自我「オレ」というものが出来ていないのである。だから幼児はこの意味では「自分主義」ではあるが「オレ主義」即ち利己主義ではない。幼児はそのような高度の自分偏重をもつところまで行つていないのである。そういう「オレ」がないかぎり幼児は第一に、非常に「暗示」にかかりやすい。いつも「オレ」というものをもつていて、外から与えられる印象をその「オレ」の目がねでこしてみているというような批判力がない。第二に幼児はそのためにそのときどきで矛盾したことを平気でしたりいつたりする。統一的「オレ」が確立しておらず、そのときどきの「自分」にしたがつて行為するからである。「オレ」の方はいつも同一で又、同一であろうとするが、幼児にはこのような「恒常性」の自分はな

い。

そこで、幼児はそのときどきで、矛盾したことをするのが平気であるばかりでなく、又、うつり気である。自己というものをしつかり保持しておいていろいろのことをするのでないからいろいろなことをおもい出しても「おもい出される事」即ちノエマの方にひきずられて、自分でかくかくのことを想い出そうという意図的回想は出来ない。断片的にはいろいろなことを実によくおぼえているがかんじんの事（と大人が、実は考えるのだが）を忘れている。

又未来を現在の「自分」の連続としてとらえることが出来ない。「オレ」というものがないからである。

「大きくなつたら何になるの」

「ウンテンチュ」

ウンテン手と現在の自分との間には何の関係もない。自分は三輪車にのるのがうまいから、大きくなつたら運転手になるのだ、という風に考えているのではない。こういう考え方は現在の「自分」と未来の「自分」との間の連続性を予定しなければならず、即ち「オレ」の知識の確立を前提しなければならぬ。幼児にはそういうことはない。

(2) 主観と客観との未分化

この「主客未分」ということは今までにも幼児心理についてよくいわれたことである。これは自我をもふくめた全ての存在を、全部同じ水平面において、ということだ、という風にいつて説明してもよいだろう。総てのものは自我との関連において、いろいろちがつた価値、いろいろちがつた面をあたえられるべきなのであるが幼児の場合にはそうなつていない。自我自体がすでに「物」と同じ面でながめられており、自分の欲望のままに、あるときはあるものが、一番大切なもののようにおもわれる。

前にものべたように、幼児の心の中では「物」はすでに「物」としての恒常性を得ている。物を「絵」とは、幼児はもはやみていない。目をつぶつても、「物」はなくなりはしない。自分がいなくなつても、「物」はなくなるわけではない。だからこの点では、「物」は自己からは独立の存在なのであるが、それはいわば「感覚的＝運動的」な面についてそうであるにすぎない。感覚の面をはなれて「物の価値」即ち「物の感情性」の方にはいると、物と自己とは未だ神秘的な関係をもつている。だから自分があるくと月がついてくるようにおもつたり自分が手をふると雨がやむようにおもつたり出来るのである。月は自己から独立の、自己とは無関係の存在ではなく、なんらか自己（幼児）と関係があるもののようにおもわれる、という自己と物との「価値感」があるのである。これを社会学者にならつて「関渉の法則」となずける。小さい子どもがおまじないを真面目にやることができるのはこのためである。

同様に、子どもは物に自己と同じ「意志」「意図」をみとめることが普通である。このように物に「こころ」や「意志」をみとめることをアニミズムというのだが、幼児は主客未分の心性に互るため自分の考えていることはそのまま他物の考えるところだとおもうのであらう。

(3) 能記と所記(SIGNIFIANT, SINIFIE)との未分化

能記とか所記とかいうのは言語学上の用語である。ソッスユールというスキスの学者がこの区別をはじめた。たとえば太陽というものがある。地球の外にあつて我々に熱や光をおくつてくれるもの。この「物」が所記である。

これを「太陽」とよぶと「太陽」という言葉は能記である。

ところで言語学上からいえば、能記と所記との間にはなんの関係もない。

太陽とよんでも「サン」(SUN)とよんでも、又「ソレイユ」とよんでも、太陽は七月にはてりつけるし、二月にはあたたかい熱をあたえてくれる。能記の方は人間のこしらえたものであり、所記の方は人間の存在する前からあるのである。

ところが、幼児はこの二つを混同する。つまり名前が、物の本質又は実体と無関係ではないとおもつているのである。

人物の画をかく。そうすると、その名前を人物にそえる。

「名前はどうしてわかるのでしよう」ときいてみると、

「考えればわかる」

とこたえる。つまり、人間なり、物なりを考えればわかる、とおもつているのである。ある着物はみればそれが赤だということがわかる。丁度それと同じく、ある人物はみればそれが「太郎」という名前だということがわかるとおもわれているのである。

だから名前は、「おぼえたもの」ではない。自分がお父さんからおそわつたものだ、ということを知らない。

「いつおぼえたの」

ときくと

「もうせんからしつてるよ」

という。たぶん子どもは生れたときからしつているとおもつているのであろう。

この位だから、たとえば、月を太陽とよび太陽を月とよぶことなどはできない。そうすれば、月がヒルマでることになつてしまう。

つまり人がみんな月とよぶから月は月なのであり、もし人がみんな月を今後太陽とよぶことにすれば、同じものがちがつた名前になるのだ、ということ——能記と所記との区別しかわからないのである。

能記がかわると、これに応じて所記の方もかわつてしまうと考える。

「名前のあるものは存在する。なぜなら、名前があるのだから。名前は物の一性質であり、物と共存的本質をなしているものと考えられている。名前は人が勝手につけたもので、つくつたり変えたり出来るものだ」という考えは、もつとおそくなつてからでなければでてこない。こんな風な名前の実意

論は自己中心性の直接のあらわれである」（ピアジエ）

この名前と同じことが「夢」についてもおこる。夢は人が勝手にみるもので、夢の中にでてくる人と、本当の人との間には何の関係もない。しかし子どもは――原始人と同じように――夢の中の人は、本当に夢の間に、夢にでてくるのだとおもつているのである。

つまり能記（夢）と所記（本当の実在の人物）との混同がある。

こんな風にシムボルとシムボライズされた当の本体、又は記号と、記号の本体との間に「関渉の関係」をみとめることは、夢や、記号が子どもにおいては非常に感情的につまり印象をあたえられる、という事実からもきている。

(4) 自我と他我との混同

これが一番つよくあらわれるのは、子どもが、自分のことを他人にすつかりわかつてもらえるとおもつていることである。子どもは自分のいいたいことだけをいつて、くわしく説明しようという努力をしない。どく小さい子などは、お母さんが、自分のかゆいところをかいてくれないと、いつてジレおこる。これは母親には説明しなくても自分のいいたいところや、かゆいところがわかるとおもつているからである。

そのため子どもは、他人にインフオーメーシヨンをあたえるために、説明したり、解説したりすることをやらぬばかりでなく、又説得の努力もやらない、という本態になる。

たとえ「説明」を要求されても、子どもは自分の立場からばかり表明するので「それ」「これ」等の言葉をつかつたり、又は全然主張のない「いつちやつたよ」等のいいかたをする。

更に、その文の間に連絡がうすい。

「でもつて……」

「それから」

「そしたら」

などでつなぎ、はつきりした事件の関係が設定されない。

(5) 個人的自我と普遍的自我の未分化

これはブールジヤードがあげた規定であるが、かなり大切なものである。

我々大人は、自分一人が知つていることと、人間全体の立場として、その代表として自分にわかつていることの間に已れをおいている、たとえば自分はクサヤのひものがすきだが、他の人々はあまりこのまないだろうとか、自分はこうこうとおもうが、それは一般の承諾をえていないとか、逆にこれこれは全ての人が承知するであろう、とかいうように、個人としての立場と、人間的立場とをはつきりしている。子どもにはこのような区別がないというのである。

このことからでてくる一番はつきりした事実は「ウソ」である。子どもは自分の一人だけ考えたことを「客観的なこと」つまり普遍的主義の立場で表明してしまう。それは他の人には当然変にきこえる。そこで、

（22頁へ）

解釈した。更に宗教の内容がちがうのは、それが教義的神学的要素から成立っているからだと断じ、進んで「子供が概念的にものを考える年頃になる以前に教義を教え込もうとするのは、非常に覚束ない方法である」と結論している。

これを本稿に於て述べたところに照合すれば、幼児期には出来るだけ事実に沿い生活に即して、経験として宗教性を覚醒するように説いたことは、即ち宗教的態度を養うことに当たり、又成るべく教授や説示による宗教的知識乃至観念を与えることを避けるように述べたことは、即ち教理的神学的内容の提示を斥けることに当たるであろう。そうとすればその行き方は、取りも直さず宗教としての基本的な共通的なものを育てることになるであろう。

想うに宗教の内容は、その人の精神的内容の成熟に従つて、それぞれの性格と、環境と、遭遇によつて与えられるものであろう。しかしそれをいかに受入れるか、受入れていかに発展するか、発展していかに結実するかは、一にそれに先行する宗教的態度の如何にかかるであろう。幼児期に於ける宗教性の涵養はかかる意味と、役割と、使命を有するものといつてよかろう。

(45頁から) 「ウソウソ、ウソおつしやい」という事になる。

こどものお話は大部分こういう混同を含んでいる。つまり純個人的立場だけをよりどころにして、全てが物語られるのである。子どもにケンカが多いのもこの為である。ケンカでなくて、口論、又は討論になるためには、二人が各「客観的主義」を確立して、その共通の地盤に立たねばならない。幼児にはこれができないのである。

(31頁から) 蟻の分泌が旺盛な若蜂は巣の造築に専念するとか、壮年の蜂は巣を遠く離れて蜜源を探訪するとか、夫々その生理的機能に応じて行動することはいうまでもない。

おわりに

ほんの大ざつぱではあるが蟻や白蟻、果は蜜蜂の社会生活をかいま見た読者はきつと直に自分達人間の社会生活を考えて見るに相違ない。そして何か割り切れないものをお感じになるのではあるまいか。そうした後味の悪さを幾分でも補正する意味で一言付加えたい。

要するに昆虫の社会は、一種の家族社会なのであつて、コロニーのメンバーは血統関係にあるといつてよい。而もこのコロニーの主宰者は、たゞ偉大なる生殖能力があるということのために存在価値があるのである、又コロニーに於ける職能的分化は総て生理的、形態的な、それこそ極めて顕著な裏ずけの下に殆めて矛盾なく発展して来たのである。(農博　農林技官)